

令和元年度第1回まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会 議事録

日時：令和元年7月17日（水）

午後2時から

場所：市役所4階 大会議室

【配付資料】

- 資料1 津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会委員名簿
- 資料2 地方創生推進交付金事業 評価・検証シート（平成30年度実施分）
- 参考資料 津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略推進委員会設置要綱

開会

市長挨拶

（日比市長）

現在、当市においては、平成27年度に地方版の総合戦略、津島市まち・ひと・しごと創生総合戦略を策定して、人口減少そして少子高齢化など様々な問題に立ち向かうべく事業展開をしてきた。この戦略を効果的また飛躍的に進めるため、国が設けている地方創生推進交付金制度を活用して5つの事業を実施した。本日の委員会で担当から委員の皆様はこの制度を活用している事業成果、そして内部評価、今後の展開などについて説明をさせていただく。事業のさらなる発展のために忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いである。

資料確認

新任委員紹介

欠席委員報告

市職員紹介

委員長挨拶

議題 地方創生推進交付金事業の進捗、評価、検証について

- ・「伝統の食と農でつなぐ人と地域にやさしいまちづくり」について、事業担当課（産業振興課）より説明

（委員長）

皆様方からご意見ご質問あれば、いただきたいと思うが、いかがか。手を挙げていただかなくても、自由にしゃべっていただいて結構。

では、まず私から。レストランの紹介があったが、大変、好評ということで、どこからの客

が多いのか。

(産業振興課長)

具体的なデータは取っていないが、市内の方のリピーターもいると思うし、また、観光客の方に、どこか食べる場所がないかと聞かれた際には、このレストランを紹介している。

(委員長)

あまりよくわからないということか。

(産業振興課長)

アンケート調査をしながら分析をすれば良かったと思うが、そこまではやっていない。

(委員長)

何に関心を持ったかというところ、このレストランを目的として遠方からお越しになったのか、もしそうであれば、食事のみでそのまま帰ってしまうのか、どこか他へ寄ってくれたのかが気になる場所であるし、地元の方が中心であれば、食事に来るだけということだと思う。この店が津島への来訪を促す核になっているのかどうかというところは、他の事業との関連性を考えると気になる場所である。店に来られた方へ紙でアンケートをお願いするというものなかなか大変だが、店員が「今日はどちらからお越しになりましたか？」と一言聞いていただくなど、大体の傾向がわかれば、この場所がどういう使われ方をしているのか、津島にとってどういう役割があるのかがわかる。折角上手くいっている事業だということなので、どうなのかなと思った。

(委員)

ここの売りは何になるか。味や値段などいかがか。

(産業振興課長)

値段としては、ランチで1,000円以上のメニューになっているが、ここのシェフは世界大会に日本代表で出られたこともある方で、地元の野菜を少しでも取り入れながら、その野菜に合ったメニューを創作して作り上げることができるところがキッチン。リエゾンのシェフの腕の見せ所と思っている。

(委員長)

この店は大変上手くいっているということだが、ひとつ上手くいったのもうひとつやろうかという気はあるのか。

(産業振興課長)

まずは、このレストランの経営を安定させていくことが重要と考えている。天王通りの空き店舗・空き家は非常に多いが、核となるこういった施設があるとないのでは客の流れが変わっ

てくると考えている。2号、3号とももちろん望みたいところではあるが、他事業とも連携をしながら、このレストランを安定させていくことが大事である。

(委員長)

この事業、単独としては自立していけるという話だが、どんな寂れた商店街でも、あるひとつの店だけ流行っているというところは結構あって、そこをコアにして、次の店へと段々広がっていくのは、割とオーソドックスなパターンで、やはり、食べ物は強いので、ぜひ前向きな事業としてやっていってよいと思う。

・「寺院と町家を活用した滞在型観光による地域再生プロジェクト」について、事業担当課（シティプロモーション課）より説明

(委員)

台湾、香港でという説明があったが、どうしてそこを選ばれたのか。

(シティプロモーション課長)

東海3県いわゆる昇龍道の地域におみえになっているのは、アジア圏、台湾や中国・香港の方が多いので、そこをターゲットとしてこの企画を作成している。

(委員)

KPIで人数は達成していて、受益者負担の適切さはB評価だが、財源の見通しはC評価ということで、受益者負担は適切で人もたくさん来たけど、財源は足りないということか。

(シティプロモーション課長)

先ほども説明したが、宿泊人数が平成30年度は837人であり、稼働率としては18%となる。私どもが考える稼働率は53%であり、現在宿泊者が月平均74人で、採算ベースに合わせるには、宿泊者は一月130人必要と考える。そうすることで完全に人件費から経費からすべてを踏まえた自立ができる。

(委員)

KPIの数字は、宿泊者は少ないけど、他の部分で参加したから達成したということか。

(シティプロモーション課長)

KPIの達成には、お寺体験、てら・まちご縁結びの参加者で、津島に宿泊せずに一定の時間を過ごして帰られる事業に関わる人が5,481人おみえになるので、この部分を足したことによってKPIが達成できたものである。宿泊者数だけでは、そのものの事業は成り立っていないということになる。

(委員)

そうすると、何をもって受益者負担が適切なのか。

(シティプロモーション課長)

事業を進めていく上で、当然経費等が必要となるが、このゲストハウスの事業を展開していくには、泊まってもらう人を増やしていく上で、それに付加して津島に来てもらった方が津島にお金を落としてもらう形を作っていくしないと事業が成り立っていかないと思う。

(委員長)

この事業費が総額 4,844 万円で、国から半分ってことだけど、その 4,844 万円は何に使っているか、主だったものは空き家の改修部分か。つまり、空き家を宿泊施設にするための改修費が主なのか、それ以外のプロモーションの部分が主なのか。

(シティプロモーション課長)

3年目は当然このプロモーション、旅行商品等で 1,000 万円使っているが、1年目と2年目については、宿泊施設の改修であったり、モニタリングのために無償で泊まっていたりしているので、その費用がかかっている。一番金額的に費用がかかっているのは、宿泊施設の改修である。

(委員長)

事業の課題として、土産等の購入に至らなかったとあるが、具体的にどんなものを売る想定をしていたか。

(シティプロモーション課長)

津島市内に昔からある店で売られているあかだ・くつわのほか、津島ならではの茶菓子や麴を使ったものなど、地元でつくられているものが売れていくことで地域の活性化に繋がるものと考えている。

(委員長)

それが思ったように売れず。

(シティプロモーション課長)

はい。時間を過ごす上で、食事をするため、市内の飲食店やコンビニエンスストアには寄るが、土産の購入まではいかない。土産物があまり浸透していないこともあるかと考える。

(委員)

ラーチーゴーのチーとゴーは、台湾語でおいしいと買うという意味だが、津島でのチーとゴーは、何を狙っていたのか。

(シティプロモーション課長)

この東海3県に来ていただいている外国人は、台湾・中国の方が多いので、台湾人ライターを招請して、津島の魅力を発信できる着物やお茶会などの取材スポットを見てもらった中で、そのものを向こうの言語で発信して売れる商品を作らせていただいた。それによって、昇龍道の関係で、北陸に来られた方が下に降りてきてもらうことを目的としてこの事業を進めてきた。

(委員)

外国人という話があるが、津島の企業にも技能実習生が非常にたくさんいて、そういう方は横の連携がすごくとれていて、特に藤まつり、ゴールデンウィークの時などは観光客として呼び込めたのではないのかなと思ったが、企業に対して、こういう活動や宿泊施設があるということは宣伝していないのか。

(シティプロモーション課長)

企業に対しては、特に周知はしていない。こういう宿泊施設があるというのは市のホームページや市の広報紙では周知している。

(委員長)

ちょっと厳しいまとめ方をすると、この事業はお金を頑張ってかけたゲストハウス事業と外国向けのプロモーションは十分な成果が出なくて、でも人は来た。なんで来たかというご朱印ブーム乗った人たちがきて、来街者を生んでいる。けども、その人たちは、残念ながら宿泊や土産購入には繋がらなかった。これは、やってみないとわからなかったわけで、やって、今のところはそういうことだとわかった。それをより当初計画した方向に近づけるようさらにいろんなところで頑張って外国人に来てもらおう、ゲストハウスを日本人や外国人で埋めようというところで頑張るか、その現状を見て、軌道修正して、力点を別のところに置いたらどうだということではこれからの課題である。

(委員)

ゲストハウスを運営していくには、人件費等の維持費が必要だと思うが、平成31年度からずっと継続していくということで、この地方創生の資金を投入されたわけなんだけれど、これをそのまま維持するのか、もしくは、どうするのかを選択していくためにどこかで評価していくのではないかと感じている。利用率は今のところ18%で、それを53%まで上げなければならぬというところでゲストハウスを違う方法で利活用していくことなどを含めて、総合的に考えなければいけない。そこはいつ考えるのか、どういう風に考えるのか。

(シティプロモーション課)

もうすでに令和元年度からこの滞在型における補助、交付金はない。そうした中で、この事業に携わっている専従の方が1人おり、その人が昨年1年間、平成30年度の宿泊者の月の動向を見たうえで、稼働日数を変えている。

他の地域のゲストハウスで、ゲストハウスだけでは事業経営が成り立っていないところでは、

副業的なものを持ちながら動かしているところがある。津島もそうしていかなければならない形になるかもしれない。

また、今3つあるゲストハウスのひとつを目的を変えて使うことも方向転換のひとつと考えている。

・「みんなで支えあうコミュニティリノベーション事業」について、事業担当課（市民協働課）より説明

（委員）

地域における担い手育成講座を3回されたということであるが、育成はできたか。どういう分野で育成できたのか。

（市民協働課長）

育成については、様々な立場の方がおり、料理が得意な人や子供の面倒をみるのが好きな人などがみえたので、講座という程ではないが、例えば皆さんが集まったときに、そういったことを披露していただいて、交流を生む方法を考えるという形で育成を行った。子どもがワークショップに加わり、どんな遊びでどんなことをやりたいかを自分たちで考えて、それを学校に広げるという方法を行った。コミュニティが主体ではあるが、民生委員など様々な分野の方に関わっていただいた。

（委員）

人件費がかかると思うが、そのあたりはどうか。

（市民協働課長）

今、運営は安定していて、客が1日100人位来れば採算が取れる計算で、現状は150人を超えており、喫茶店の営業に関しては何ら問題ない。ただ、KPIについては公益利用分ということにしており、子ども食堂、町内会の会議やお茶の会などに活用されている。

（委員長）

総事業費は3,361万円で、この使い道はなんだったのか。

（市民協働課長）

平成28年度は、アンケートを実施し、380万円。平成29年度は、縁側カフェ「えん」のリフォーム、リノベーション、人材育成講座事業を実施し、2,480万円。平成30年度は、主に人材育成講座を行った費用である。

（委員長）

話を伺う限りこの事業は結構うまくいっているように感じる。特に地域の居場所づくりに関しては、今どこの自治体も地域コミュニティをどうやって維持していくかが大きな課題になっ

ており、そういう点でいうと非常に上手くいっていて、これを全市展開していけばいいなということ。選ばれた学区は、元々そういう土壌があるとか、ベースとなる地域コミュニティが割としっかりあるエリアということか。

(市民協働課長)

そういった土壌ももちろんあるが、こちらから8小学校区のコミュニティに声かけをして、手を挙げていただいた経緯がある。平成30年度については、神島田校区で開催したが、皆さんかなり意欲的に参加していただいた。

(委員長)

次の候補は決まっているか。

(市民協働課長)

次の候補も予定はしているが、財源等もまだ決まっておらず何とも言えない。

(委員長)

私の本業において、周りの自治体といかに差別化して、自分の市町を発展させていくかというのがメインのテーマだが、これなんかも、そういうネタに十分なる話で、隣近所の市町村がやってない、津島ならではで売っていけるような感じなので、引き続き発展させていただければというのが私の感じるところである。

・「みんなで発見・発信・おもてなし！津島“にぎわい”創出プロジェクト」について、事業担当課（シティプロモーション課）より説明

(委員)

説明で収益化ということもあったが、この事業はどちらかというと収益云々じゃなくて、津島市をいかにPRするかということが一番中心になる事業なのではないかと思う。お金が入らなかったからいけないのではなくて、これだけのことをやっているのだから、津島市をもっとわかってもらったという、そういう評価の仕方をしたほうが、評価としていいような気がする。もっと津島をPRしていくんだという姿勢は見えるので、もっと胸を張っていただいていた方がいいと思う。

(シティプロモーション課長)

本当にありがとうございます。この地方創生事業については、地域の担い手を育てて自立した事業化ということが謳われており、そうした中で、少しでも収益性が上がるような恰好にしていきたいと思っているので、B評価とさせていただいた。

(委員)

今の委員のお話でPRという部分について、我々の会社とは隣合わせの部分があるが、私の

感覚的な意見としては、非常に次から次へといろんな企画が出てきて、すごいと思う反面、告知・PRが追い付いていかない、なかなか周知ができていないと思う。我々のケーブルテレビとFMをもっと活用していただいて、市民の方にPRしていきたい、というお願いとして一言述べさせていただいた。

(委員)

どういう受益者負担が適切なのか。ツアー参加者からお金をもらっているとあって、これを見て聞く限り、そんなにコスト的には悪い雰囲気を感じない。

(シティプロモーション課長)

まち歩きそのものをひとつの事業にしていくにあたって、大体の金額にすると、1人1,500円から3,500円の事業である。その中で、体験場所への支払い等々があるので、事業を企画している津島おもてなしコンシェルジュの手元にはボランティア的な金額しか残らない。ボランティアでもいいのかもしれないが、事業の収益性には見合っておらず、曲がりなりにも事業をしていくために、また、そのコンシェルジュ組織を維持していくためには、ある程度の収益がないと動かしていけないということが言える。

(委員)

参加費として払っているのは、ほとんど会場等に払うお金だけでやっていて、コンシェルジュはボランティアでやってくれているけど、その人たちの人件費としてみるとそこまではもらっていないということか。

(シティプロモーション課長)

今は交付金の事業のため、例えば、パンフレットもかなり立派なものができる。ただ、こういうものを作っていくと思うと、当然今の動きだけでは難しい部分があって、パンフレットも、これだけのものではなくて、もっと簡易なものでも事業は継続できるが、少なくとも人材が、皆さんがこの事業に取り組んでいくためには、多少、収益性が上がるようにしてあげないと向上性が生まれてこないと思っている。

(委員)

ツアーの価格設定はアンケートをとったり、それ以上金額を乗せると参加者が入らなくなるというのは、調べてあるのか。

(シティプロモーション課長)

アンケートで調べている。どの程度の金額が妥当か、どういう内容が良いかを調べて設定してある。

(委員長)

まち歩きツアーに参加されている方は、市民か。



(シティプロモーション課長)

市外の方もいる。全体の比率でいうと、市内の方が17%、県内の近郊の方が55%、名古屋市の方が19%、残りは県外の方になっている。

(委員長)

そうすると、まち歩きツアーというのは、地元の市民の皆さまが自分たちのシティプライドを高めるためのイベントというよりも観光客を呼び寄せるメニューということか。

(シティプロモーション課長)

おもてなしコンシェルジュはシビックプライド、いわゆる自分たちの魅力を発信していくことと、市外・県外から津島に来てもらって津島を知ってもらおう観光的な事業になる。

(委員長)

どのように告知や宣伝をされたか。

(シティプロモーション課長)

告知については、名鉄等にポスター・チラシを掲載している。また、ホームページ、SNS、新聞への記事掲載や海部圏域であればクローバーテレビにもお願いしている。あと、知人からの紹介もある。

(委員長)

ツアーは割といっぱい来てもらっていて、その一方でおもてなしコンシェルジュの認定者数それからOSHI、ステーションの合計登録者が伸び悩んでいる、こちらのほうは市民の方ということになると思う。観光をある程度やっていこうという自治体だとかいうことをやっているが、自分たちのまちに関心のある層はどの自治体でも少ない。その人たちは、喜んでこういうのを登録したり、検定を受けたりするが、その種が尽きてしまうと萎んでしまう。別にどこでもそうなので、津島だけでの話ではないが、なかなか、そこを広げていく策は難しい。

このコンシェルジュに認定されている人たちは、そういうベースのある人、地元への関心の高い一部の層、そういう方々か。

(シティプロモーション課長)

多分そうだと思う。コンシェルジュの認定講座を受けられる人は津島に興味がある、市外の方も若干みえるが、興味のある人、津島を紹介したいという気持ちの人がなっている。なかなか興味のない方にコンシェルジュになりましょう、といってもそのまちを紹介したいという気持ちは生まれてこないと思う。

(委員長)

そうだとすると、この地元の学校への周知ができなくて若者が参加できなかった、というの

は、僕は大学教員なので学生の考えをよく見ているが、周知したところに来るかな、というところがあって、だったらこの先のこの事業に関しては、コンシェルジュ数を増やすことよりも違う攻め方もあるのかなと。

(シティプロモーション課長)

その点について、若者は自分たちが実際そこに行ってみて、そのものにいいと思ったものをインスタグラム等のSNSで発信していく、というのを常日頃からしているので、それを大きく拡散して津島の認知度を上げていきたいと考えている。

(委員)

コンシェルジュは年齢的にどれくらいの方が登録されているのか。

(シティプロモーション課長)

平均で言うと50歳代くらい。

(委員長)

平均で50歳くらいだと、意外と若い。

(委員)

NPO法人まちづくり津島と観光協会が連携した事業で、企画からコンシェルジュに参加いただきながら、自分たちの企画と一緒に共同作業をすることによって思いを形に変えていくという形で参加していただいている中で、ボランティアができる環境にある方たちは、65歳過ぎの方たちが一番活発に動いて、それに引きずられるように60歳以下の方が出てくるという状況である。まち作りとしては一番いい形ではないかという感覚を持っている。ただ、やり方だとかそういう部分では、60歳過ぎてからまちに関わり始めたので、行政のリードやいろいろな団体と関わることによって、ひとつひとつ覚えていって3、4年目になって自分のやりたいことが少し表現できるようになってくる。そんな中で、市民協働課の交付金を活動資金として、やられているのが、おもてなしコンシェルジュであり、発足して4年目だったと思う。今50人を超しているのではないかと。自分の好きな時に、この日は出れますよと手を挙げてやっていく形でそんなに固くはない。利益を目的にしているのではなくて、自分たちが第一線から離れても、地域と関わることの喜びということで参加をしているから、好きなことはやるけれど、嫌なことはやらないよ、という部分のところで、ベクトルをどこに向けようかというのが一番難しいのではないかと思う。

(シティプロモーション課長)

コンシェルジュについては、実は139人の方がおり、実際に活動してみえるのは、委員が言われた50人位の方が中心になっている。

(委員長)

この事業に関しては採算云々のお話があったが、採算で議論して、それで儲からないから切ってしまう、そういう性質のものではないと思う。

・「天王信仰の総本社「津島神社」への参道を核とした門前町再生事業」について、事業担当課（産業振興課及び都市計画課）より説明

(委員)

天王通りを津島神社への参道と見立てるとあるが、例えば津島神社や地域住民との協力体制はどうなっているか。また、参道と見立てるということは、例えば津島駅に観光バスを停めてもらうってそこから天王通りを歩かせるということは可能なのか。

(産業振興課長)

まずは協力体制について、津島神社とは体験プログラムやマッチングシステムについて何か協力をしてやっているということは、今のところない。津島商工会議所や商店街連合会には、この事業の目的や内容の説明など、事業に取り掛かる前に説明させていただいて、協力いただけるような店舗の情報をいただいている。また、店舗間がお互いに WIN-WIN の関係になるように、例えば、ここの店舗での体験プログラムがおもしろいよだとか、こんな美味しいものがあるよだとか、そういう店舗間の連携はそれぞれできる限りとっていただいているところですが、まだまだ店舗同士の顔繋ぎができていないところもあるので、顔の見える関係づくりの仕組みができればいいと考えている。

移動の関係については、今回の体験プログラム参加者のアンケート結果を見てみると、7割くらいが車で来ている。そういう方は、おそらく津島神社、天王川公園、あるいは有料の駐車場等を活用されている。電車で来られた方の移動手段としては、何か仕組みが必要だということで、事業の中で移動手段についての検討がされ、駅前の自転車屋にレンタサイクルを5台確保した。利活用の周知はこれから始めるが、体験プログラム、キッチン・リエゾン、ゲストハウス等の仕組みの中でレンタサイクルを活用したり、あるいは、市外まで足を伸ばして愛西市や木曾三川公園に行ったりといろいろな活用方法が考えられるので、その部分については本年度十分検証していきたい。

(委員)

天王通りは、昔は人が本当によく通っていて、お店に入った人もたくさんいたし、みんなが通ったが、今は避けて通る。車も自転車も天王通りは通らずに横の道を通って目的地へ行くことが多い。普通で考えると人がいるから道ができ、あるいはまちができるんだけど、人がいないのに店や道を作ってもそれでいいのかということをお心配する。

(委員長)

なんでそこを通らないのか。どなたかお分かりになるか。

(委員)

どうしてかわからないが、自分も通らない。

(委員長)

ご自身がお通りにならないのは、なんとなくか。

(委員)

天王通りに入るのが面倒だから、脇から入ったほうが早い。ここに今いる方で、最近天王通りを歩かれた方はほとんどいらっしやらないのでは。

(建設産業部長)

天王通りはかつての繁栄の中で、車中心の二車線の県道として整備がされていて、歩道の幅が狭い、段差がある、そこを人が歩くと自転車と交錯するということが、人が歩いたり自転車が通ったりというよりも車中心の道路形態になっている。更には都市計画として、拡幅の計画が70年80年前からあるが、現実はまだ店が張り付いて、看板建築が成り立っていて、そこが衰退して、今の状態になっている。ワークショップでは、天王通りを将来どうしていくのか、具体的に言えば都市計画を、拡幅計画をそのまま残していくのか、あるいは、地域の人たちが歩いてゆっくり回れるような道作りをするのかという議論をした。その意見がやはり現道を中心とした人にやさしいまちづくり、こういった道にしようよという議論に持ち込んでいるので、これが一つのきっかけとして、地域の方たちが歩いて暮らせる、もしくは、いろんな賑わい事業の中で、人が安心して歩けるような道づくりにしていきたいという方向性を持っている。当然、車はどうなるんだという話があるので、それは通過交通の対策として周りの幹線道路の整備を急いで、車中心よりも歩いてゆっくりと滞在できる、食事ができる、見れる、遊べる、食う寝る遊びができるようなまちづくりのハード的な部分を都市計画が検討している。

(都市計画課長)

補足だが、ワークショップを進める中で人優先の道路に変えてほしいというご意見もあって、個人的な意見としては、まだ車の量はそこそこあると思っている。また、休みの日になるとそれなりに人が歩いている。部長も言ったとおり、休日は人と自転車が交錯する危険性もあることから、ゆくゆくは人を優先した道路づくりというところを目指してやっていくということも検討していきたいと考えている。

(委員)

門前町である以上、観光客を対象として賑わいという形を持ってくると思うが、今、バスを降りられるのが津島神社の南門のところで、全部そこで降ろして回遊しているという状況にある。津島神社の門前町がない状況の中で、藤まつり期間中には500台のバスから降りてくる。門前町としての機能をどのように考えていくかということが考え方・策略としてまとめれば、いろいろな投資をして店ができた部分をこうした方たちが通るルートを考えられるのではないかと思う。その辺りを行政で具体的に考えていただければ、ボランティアやいろんな方の活躍

の場も広がると思う。

(都市計画課長)

ワークショップの中では、津島神社の東門側を神社寄りのゾーンとし、門前町として整備していくべきではないかという意見をたくさんいただいている。先ほど駅から歩くという意見もいただいたが、駅から歩いていただくことで賑わいを創出するといったことを念頭に、天王通りを参道にして、人を中心にしたまちづくりを目指していくべきじゃないのかというご意見もいただいている。バスについては、南門あたりのところでこれからも乗降していただくというような棲み分けになるのではないかと考えている。

(委員)

津島駅から津島神社までの 800m の距離の中で、年間 1,000 台分の観光客がお金を落としてもらえるような門前町機能を作ることの相乗効果を考えていただけるとありがたい。門前町というのが、馬場町のところから門前町なのかというと、そうではなくて、駅からのどこかに核とするもの、例えば、観光交流センターは案内所的な機能があるので、そういう核となる部分へ呼べるような仕組みを考えてくべきと思った。

(都市計画課長)

今年度から 3 ヶ年かけて都市計画マスタープラン等の改訂を予定している。今のご意見も参考にさせていただきながら、まちづくりを検討していきたい。

(委員長)

天王川公園や神社へ行く通りを門前町でやっていくための一番のポイントは、鉄道事業者とどうやって仲良くなって、鉄道事業者に津島と組むと儲かると、犬山や半田の次は津島だと思ってもらえることがほぼ全てだと思う。バスで来る人はもちろん、現状は大きなイベントにバスで来ているが、平日頃となると津島神社に観光バスで立ち寄られる方はそれほど多い数ではないのではないか。

(産業振興課長)

観光バスは、藤まつりと天王祭のとき以外にも津島神社の津島講の観光バスが春先に来るが、どうしても季節限定のものになる。

(委員長)

常時来ていただくとなると鉄道が大事になって、そのためには名鉄に津島を売ってもらって、津島を売ることによって彼らが儲かるということを見せないといけないので、このテーマに直接関係ないが、勝負所はそこなのかなと思う。

もうひとつ気になったことは、この事業の中でも体験プログラムの話があって、その前のまち歩きツアー、食と農のところでも体験プログラムみたいなものがあるって、充実はしているけどもちょっと多すぎやしないかというのが、正直な感想である。もちろん各部局での事業なの

で、それぞれでやるとこういうことになるんだけど、これで交付金が段々費えていくわけですから、そのところで整理をする形でやっていかれるといいと考える。

最後に、全般を通して何かあれば。

(委員)

先程、バスの話が出てきたが、今後バスの運転士そのものが減ってくる。あきらかに人口が減ってくるので、バスへの就労人口も減っていく。やはり鉄道にシフトをかけていく時期が来ているのではないか。バスで500台、1,000台と確かに今はあるけども、今後10年間で減っていく。名鉄の社長も今は津島に向けてくれているので、温めていかれるといいかと思う。10年後には勝負がつくと現場は思っている。

(都市計画課長)

先ほど少し申し上げたが、天王通りのあり方、にぎわい創出というものを題材に2年間ワークショップをやってきた。今、意見があったように天王通りだけでは成り立たない。津島駅を含めた検討が必要だというご意見もいただいているところ。今後3年かけて都市計画マスタープラン等を改訂するが、検討にあたって、名鉄にも策定委員に入っていただくよう内諾いただいている状況である。名鉄と市の思うところは若干違う可能性もあるので、そのあたりは名鉄の思いも入れながら整理をしていきたい。

(委員長)

議論も尽きたようで、これで締めさせていただく。市長から今日の議論を聞いて何かご意見、ご感想をお願いします。

(市長)

この地方創生事業は、知恵を出した行政・自治体がお金を取ってくるという事業であって、大きく5つの事業、その中には、ひとつひとつを分けると、様々な数十の事業が動いたということである。部を越えて連携しながらやってきて、いろいろな課題も見えてきたが、職員も地方創生事業によりだいぶ実力をつけてきた。手さぐりで事業を進めてきて、荒削りの部分はあるが、これにより津島がどうやって生き抜いていくかというヒント、その動きというのが、このお蔭で見えてきた。まさにこの地方創生が津島市に与える影響は、職員の成長を含めて大きかったのではないかと考えている。

鉄道と連携しなければならないという点については、商工会会頭や県議会議員と名鉄の社長を年2回ほど訪問して要望をしている。県の都市計画マスタープランの拠点駅に位置付けられていることや、乗降客も目的をもって来ていることを把握されており、今の閑散とした駅ではいかんと社長も話をされていた。まさに鉄道を活かした事業が必要だと考えている。

また、マスコミにも多く取り上げられており、『地方創生観』という雑誌にも津島市の地方創生事業が紹介されていた。新聞でも見られた方もいると思うが、「自治体の魅力度ランキング」ということで、全国の1,741自治体を対象に、生活インフラや福祉、教育などに関するデータを人工知能で解析し算出したもので、愛知県内では長久手、日進に続いて津島は3番目であっ

た。様々な形で地方創生を切り口として努力していく。

今回いろいろなご意見をいただき、課題がわかったので、これを整理して、10年、20年先の津島市の人口減少、少子高齢化に何としてでも立ち向かっていかなければいけない。

最後に本日のお礼を申し上げ、私のあいさつとさせていただきます。

## その他

(企画政策課長)

今後の会議の予定として、令和元年度第2回の委員会を10月頃に開催したい。詳細については、事務局から後日連絡する。